

# 学士入学の選抜方法に関する一考察

高知医科大学 北添 康弘, 奥原義保, 瀬戸勝男

## 1. はじめに

最近、大学学部卒業者の医学部再入学制度の導入が注目されている。その理由は次のようである。受験生が高等学校の成績や教師・父母の意見などに従って医学部を志望し、将来医者や医学研究者になるための本人自身の「動機付け」や「意欲」がしっかりしないまま入学する場合がある。このことは、医学部に限らず他の学部でも共通の課題であるが、医学部の場合には医療という特殊性（すなわち患者を対象とする）の故に特に重要である。従って、アメリカやカナダにおけるように、一旦カレッジを卒業して医学部に入学する制度では、上記問題が軽減されると共に、医学は理工学や他の基礎的学問を応用する実学的要素が高い学問分野であるので、他学部での経験は医学を学ぶ際より深い習熟度に達する可能性がある。

本研究では、高知医科大学での過去の学士入学者の実績をもとにして、学士入学のあり方について考察する。

## 2. 過去のデータ解析

1979年度から1996年度までの本学への学士入学者は全入学者1603人中82人であり、以下の特徴を持つ。

### 2-1) 年次別推移

学士入学者の年次別推移を図1に示す。学士入学者は全体の4.5%程度であり、1979年度には9%であったがその後減少し、88年度には0%というときもあったが、最近ではまた増加傾向にある。

### 2-2) 地域別出身者数

高卒と大卒で出身地域に差があるかどうかを調べた(図2)。大卒者は高知21人、高知以外の四国9人、中国6人、近畿18人、中部6人、関東13人、九州6人、東北・北海道3名で、高卒の場合と比べると中国地区が少なく関東地区が多い。

### 2-3) 学部別出身者数

工学部25人、理学部11人、経済学部10人、文学部10人、法学部7人、医学・薬学部6人、農学部4人、不明9人で、理科系出身者(46人)が文科系出身者(27人)より相当多い。グループ分けすると、まず工学部が圧倒的に第1位でその次に理学部、経済学部、文学部が続き第3のグループに法学部、医学・薬学部、農学部が入る(図3)。

### 2-4) 国公立別出身者数

国立54人、公立4人、私立24人で国立大学出身者が非常に多い。

### 2-5) 入学後の学内成績

従来解析で以下のことが分かっている。現役組はセンター試験の成績は悪いが、一般教育、基礎医学、臨床医学と高学年になるにつれて良くなる。逆に、多浪組ほどセンター試験の成績は良いが高学年になるにつれて悪くなり、臨床医学になれば現役組と多浪組の差は歴然とする(図4)。ところで、今注目の学士組はセンター試験の成績が良く、特に一般教育の成績は非常に良い。しかし、高学年になるにつれて相対的に成績が下がり、臨床医学では現役組より悪くなっている。また、

理工系出身の方が文化系よりも成績が良く、大学中退組が最も悪い(図5)。

## 2-6) 留年率, 退学率, 大学院進学率

学士入学者は全体的に留年と中途退学は少ないが, 大学院(本学)への進学率は低い。一方, 大学中退者は留年と退学が多い(図6)。

## 3. 学士入学者の選抜方法のあり方

上記データをもとにして, 学士入学者の選抜方法のあり方について検討する。まず, 一般教育の成績が非常に良いことから, 従来の入学試験は意味がなく, 一般教育を飛ばして直接専門課程(3年次生)に入学させた方が良い。つまり, 出身大学で取得した単位を可能な限り認めることである。

選抜方法としては, 出身大学の成績と面接を十分時間をかけてやるのが考えられる。その際, 一案として, 卒業論文の内容を短時間にまとめて発表させてもよい。更に, 面接の際, 卒業論文の内容について論文の目的, 動機, 結果の意味, 今後の課題などを聞くことが考えられ, そうすれば学問に対する熱意と姿勢をより深く理解でき, 更に多少議論をすれば人間性も多少分かるのではないかと思われる。ただ, ここで単科大学の医学部の中にその内容を十分に理解できる人材が乏しいことが問題である(理・工学系出身者が特に多いので)。志願者数もそれほど多くなく, 面接時間を十分にとることはできると思うし, 試験日も時期的にいつでも実施することが可能であろう。

## 4. まとめ

選抜方法の選択に当たって, まず大学側が考えなければならないことは「学士入学者に何を期待するか」ということである。彼らの特徴は, 医者や医学研究者になることの「動機」と「意欲」をしっかりと持っていること,

および既に医学以外の学問の経験があるということである。これらについては, 十分な面接と既卒大学の成績などでチェックできるであろう。

過去の学問の経験を医学の中で生かすということであれば, 例えば物理学科出身の学生であれば放射線医学, 生物学, 化学であれば生化学や病理学, 電気・電子工学であれば生理学, 法学や文学であれば社会医学, といったように適応する色々の分野がある。このような場合, 学部学生といえども早い段階で各研究室に出入りさせて通常の教育以外の学問の修得に勤めれば, 大変ユニークな人材を育てることになる。本学の今迄の選抜方法では大学院への進学率の低さからみても学士入学者の特徴を実際の教育の中で生かしてなく, 全く共通な教育を行っている。

従って, 学士入学者の特徴を生かすような教育システムを大学側で積極的に準備しなければ, 制度を作っただけでは意味がないし, かえって変則的なカリキュラムのために労多くして実りの少ないことになろう。

医学部の3年次編入の場合の最大の問題点は2年次学生に行っている解剖学をどうするかである。解決方法は3年次編入生に対して2年次学生と一緒に受講できるようにすることである。修学者にとって2年間は非常に大きいので, このようにすれば一般教養を繰り返さないためフレッシュな向学心を持続させて大学院の進学率も増える可能性がある。

図1 学士入学者の年次推移

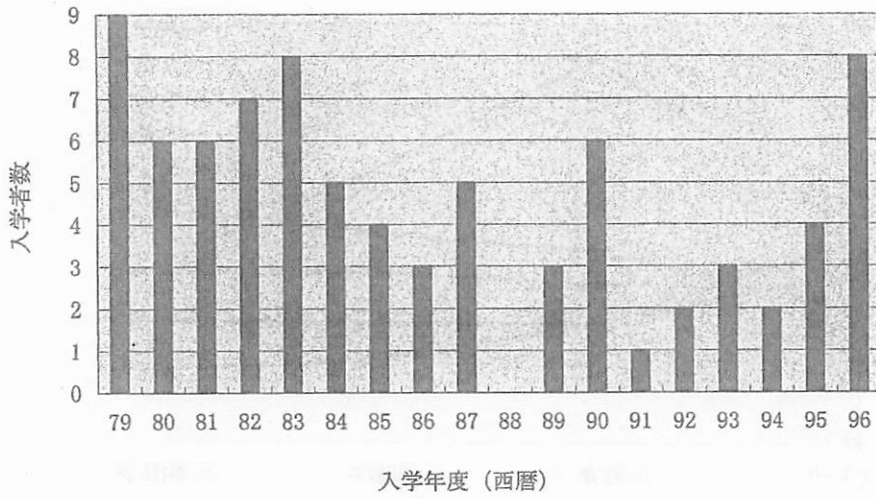


図2 学士入学者の出身地域別割合

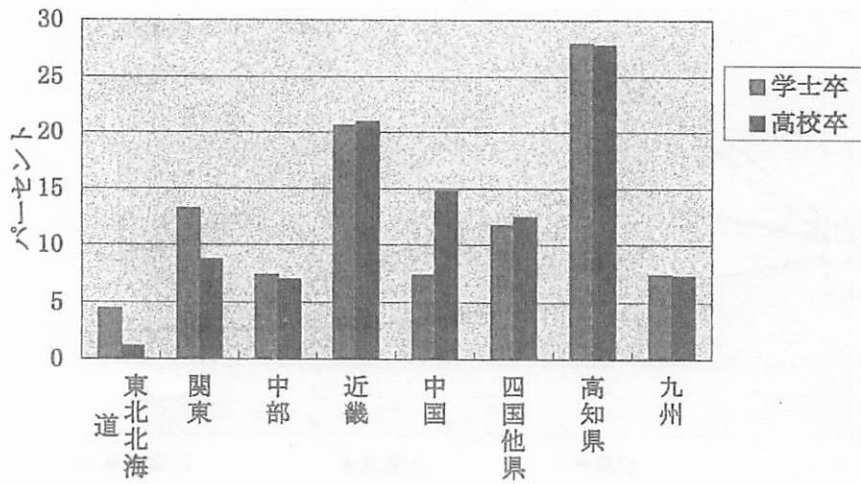


図3 学士入学者の学部別内訳

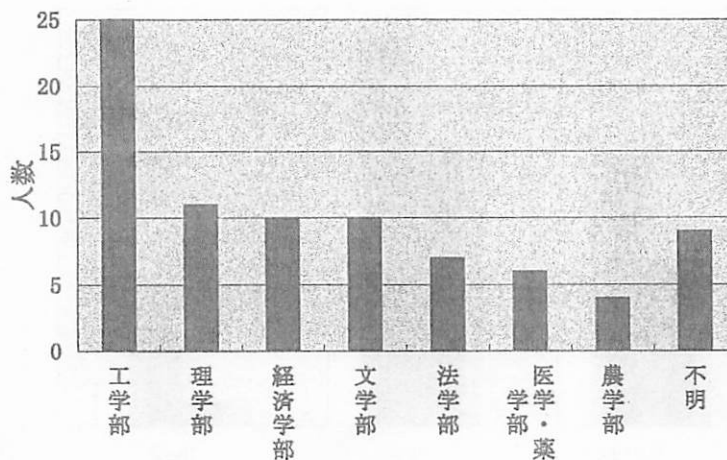


図4 学内成績の比較

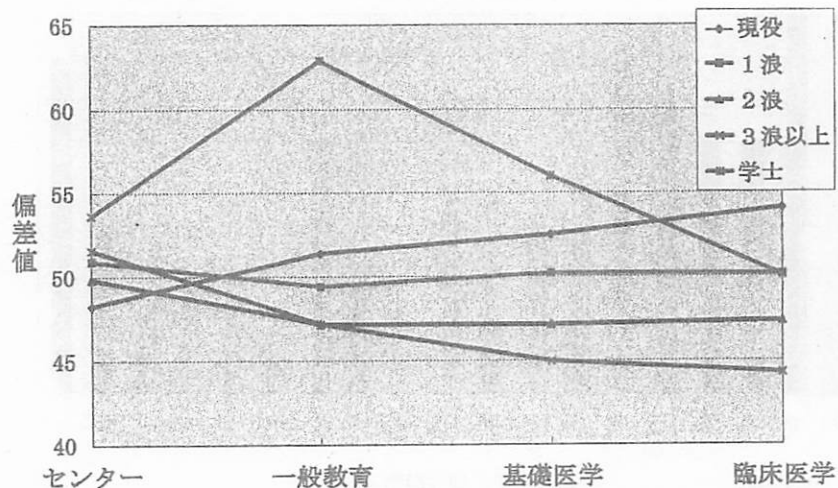


図5 学内成績の比較

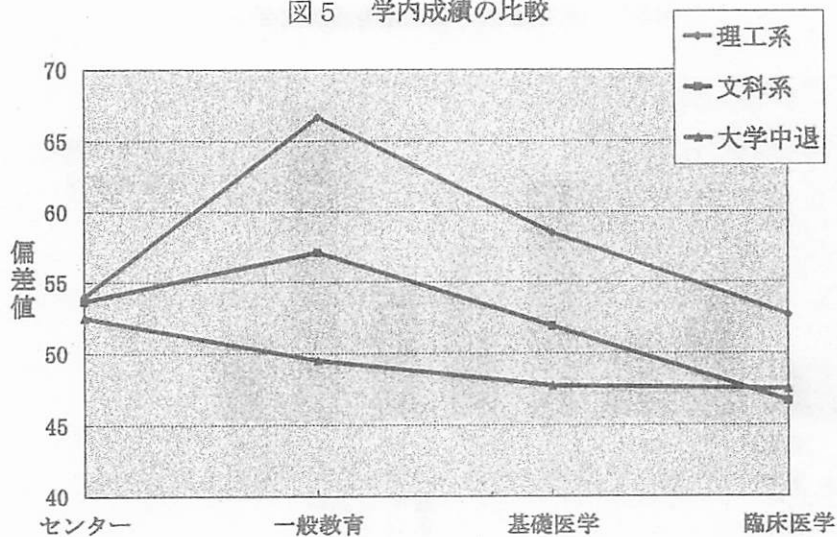


図6 大学院進学、留年、退学の割合

